

要 旨

本研究は、資料による事実を基に、社会的問題に潜在する価値を考えさせ、意見交換の活動を通して、社会的思考力を高める指導の工夫を探ったものである。2人組→少人数グループ→全体の3段階による意見交換の場を設定し、事実を基に未来を予測させながら、価値の比較検討を行わせた。このことで、生徒は社会的事象を身近にとらえ、様々な立場や側面を関連付けて考えることができ、社会的思考力の高まりが見られた。さらに、価値が続くことにより形成される社会を未来予測することで、よりよい社会を目指して、様々な立場の考えを踏まえた公正な判断ができるようになった。

〈キーワード〉 ①意見交換 ②未来予測 ③価値の比較検討 ④社会的思考力の高まり

1 研究の目標

よりよい社会を目指し、公正な判断ができる生徒を育成するために、資料を基に価値を意識した意見交換の活動を取り入れ、社会的思考力を高める学習の指導方法の工夫を探る。

2 目標設定の理由

現代の社会は、情報化、国際化、高齢化などが進行し、価値観の多様化とあいまって、世の中の状況が複雑化し、刻々と変化し続けている。そうした社会で、人権問題や環境問題など多くの問題が深刻となっている。平成20年3月告示の新学習指導要領における中学校社会科の目標として、「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」¹⁾とある。多くの問題が山積する社会を生きる子どもたちが、直面する問題に立ち向かい、よりよい社会を形成するために、公民的資質の一つとして公正な判断ができる能力を備えることが重要であると考えられる。

そこで、公正な判断ができる能力を備えるためには、社会的思考力を高めることが重要となる。社会的思考力とは、社会的事象を多面的・多角的に生徒がとらえ、他の事象と関連付けながら、社会の諸問題の解決を目指すことができる力と考える。また、価値観が多様化した社会においては、社会的事象を潜在する価値を意識して考察させることが、より公正な判断につながると思われる。

しかし、これまでの社会科学習の指導では、習得させた知識を基に、社会的事象についての思考や表現をする場面の設定が十分になされず、確実な知識の定着ができていない現状も見られる。

以上より、本研究ではグループでの研究課題を受け、資料を基に価値を意識した意見交換の活動を取り入れ、学習指導の工夫・改善を図る。生徒が、よりよい社会の形成者として、他者とかかわりながら、社会の諸問題の主体的な解決を目指し、様々な立場の考えを踏まえて、公正な判断ができる能力が必要であると考え、本目標を設定した。

3 研究の仮説

価値判断が求められる社会的問題を設定し、次のような手立てを取り入れて、価値を比較検討する学習を実践すれば、よりよい社会を目指して、様々な立場の考えを踏まえた公正な判断ができるようになるであろう。

- ① 資料分析による社会的問題の多面的・多角的な考察
- ② 2人組→少人数グループ→全体の3段階による意見交換の活動
- ③ 価値が続くことにより形成される社会の未来予測

4 研究の内容と方法

- (1) 社会的思考力や判断力について、先行研究などの文献等による理論研究を行う。
- (2) 価値判断を取り入れた授業の指導方法について、先行研究などの文献等による理論研究を行う。
- (3) 本研究の学習に関する生徒の意識について、アンケート調査を実施し、分析する。
- (4) 所属校の第1学年の地理的分野において授業実践を行い、仮説について検証する。

5 研究の実際

- (1) 文献による理論研究等

ア 公正な判断力

岩田は、社会科で育てる子ども像について、「社会認識内容を豊かに育成し、それを判断材料として価値判断をさせれば、市民的資質が育つ。」²⁾と提示している。社会認識内容は、社会を知る働きとその結果としての知識の2つの側面が含まれる。市民的資質は、公民的資質の一部ととらえ、その一つとして「公正な判断力」があり、子どもが社会に出て必要な力の一つと考える。本研究では、公正な判断力を、「学んだことを生かし、よりよい社会を意識して、様々な立場の考えを踏まえた判断」とし、価値判断を行えば、生徒は公正な判断ができるようになると思われる。

イ 社会的思考力

森分は、社会科における思考力について、「社会科の学力の中心的要素であり、社会的事象を、客観的に、より広く深く、より精密に、より間違い少なく、すなわち、科学的に捉える力」³⁾と述べている。社会的事象は、社会の事実や現象のことである。また、思考や判断が独断と偏見に陥らないようにするために、岩田は、「集団の中での批判・吟味の場が必要」⁴⁾と述べている。本研究では、社会的思考力を、「資料による事実を基に、社会的事象を多面的・多角的にとらえ、他の事象と関連付けながら、社会の諸問題の解決を目指すことができる力」とし、この力を高めるために、2人組→少人数グループ→全体の3段階による意見交換の活動を取り入れる。

ウ 価値判断

佐長は、「価値とはそれ自体として無条件によいもの、何らかの目的のための手段ではなく、目的そのもの」⁵⁾と述べており、正義、自由、平等、幸福などを指している。本研究では、価値を、「社会全体（個人も含める）の幸福につながるもの」ととらえ、価値判断を、「社会的問題に潜在する様々な価値を踏まえて、優先する価値を決めたり、対立する価値の両立を目指したりする、社会全体の幸福につながる判断」とする。授業において、資料による事実を基に、未来を予測させながら価値を比較検討させ、価値が続くことで形成される社会を考えさせて、価値判断を行わせる。

- (2) 研究の全体構想

岩田の、「価値分析の基本的学習過程」(図1)を基に、社会的思考力を高める学習過程を編成する(次頁図2)。

ア 資料分析

価値判断が求められる社会的問題を設定する(I 価値論争問題)。その際に、問題における肯定側と否定側の対立の形式を、「A対B」または「A対非A」のどちらかに選択する。そして、問題に関する複数の資料を準備する。教師が資料を準備する理由として、以下の3点を挙げる。①資料収集の時間を省く、②資料が肯定側又は否定側のどちらかに偏るのを防ぐ、③資料の公正・公平を期し考えが偏らないようにする。

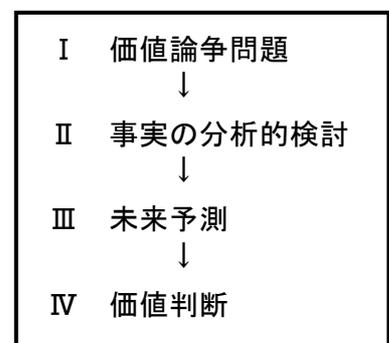


図1 価値分析の基本的学習過程

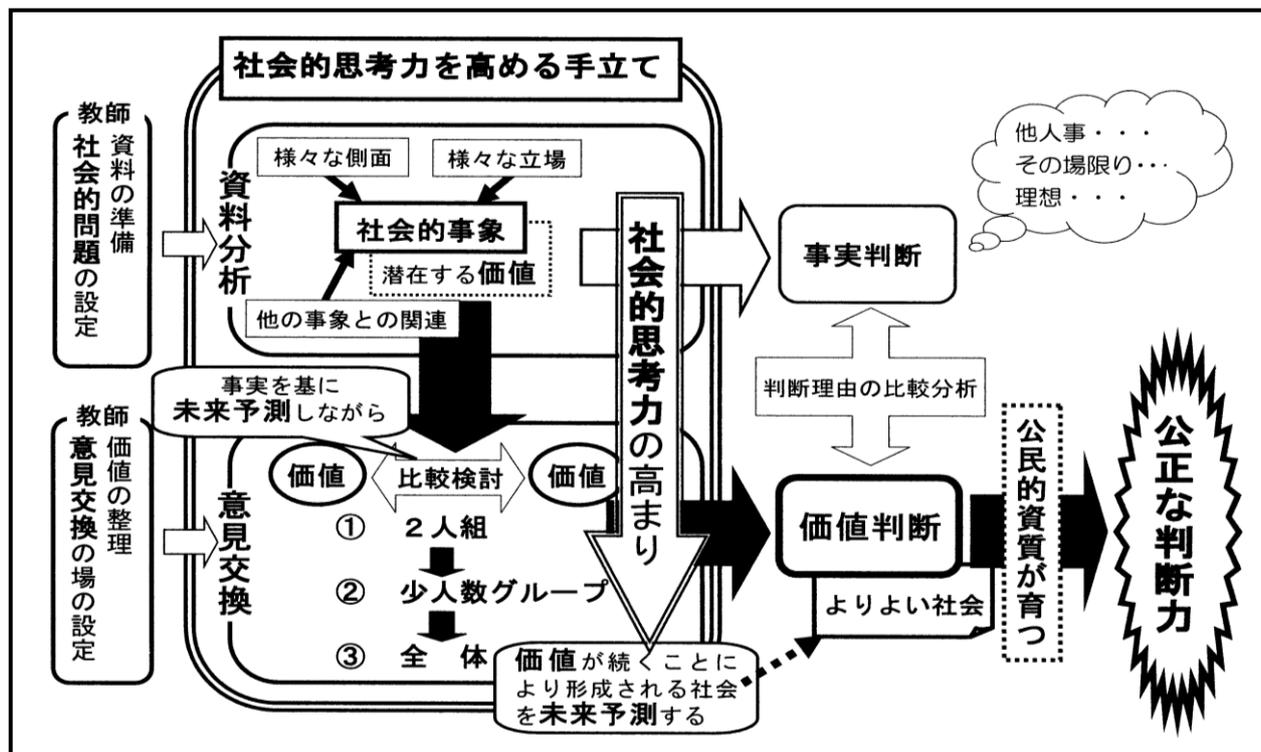


図2 研究構想図

次に、資料を多面的・多角的に分析させる（Ⅱ 事実の分析的検討）。だれにとってどのようなメリットやデメリットが発生するのかを読み取らせ、比較検討後、A又はB（非A）の判断をさせる（事実判断）。

イ 意見交換

事実判断後、意見交換の活動における立場を、本人の意志とは無関係にA又はB（非A）の2つに分ける。まず、自分の立場のメリットが続くと、どのようなよいことにつながるのかを個人で予測させ、潜在的価値（～はよいこと）を考えさせる。次に、以下の3段階による意見交換の場を設定し、価値を比較検討させる（Ⅲ 未来予測）。

- ① 2人組・・・互いの考えた価値を検討させ、自分たちの立場の価値を決定させる。
- ② 少人数グループ・・・事実を基に未来を予測させながら、反論を考えさせることで、価値を比較検討させる。
- ③ 全体・・・対立する価値を整理させながら、比較検討させる。そして、価値が続くことにより形成される社会を考えさせ、よりよい社会を意識させる。

ウ 価値判断

意見交換後、再度A又はB（非A）の判断をさせる（Ⅳ 価値判断）。岩田は、「市民的資質の成長は、価値判断の変化やその判断根拠を分析すれば評価できる」⁶⁾と述べており、生徒のワークシートにおける事実判断と価値判断のそれぞれの判断理由を比較分析することで、社会的思考力の高まりを検証できると考える。また、よりよい社会を意識し、様々な立場の考えを踏まえて判断しているかを分析することで、公正な判断ができているかを検証できると考える。

(3) 授業実践

ア 社会的問題の設定

単元「世界のなかの日本の工業」（第1学年 地理的分野）

論題「日本企業は海外生産を続けるべきか・縮小すべきか（国内生産を増やすべきか）」

イ 意見交換の活動の活性化

(ア) 具体的な手立て

意見交換の活動における立場（海外生産を続ける派又は縮小する派）を，本人の意志とは無関係に振り分けた。2人組は，学力面を考慮しながら，話すことが苦手な生徒と得意な生徒を組ませた。そして，対立する立場の2人組を組み合わせて，4人組の少人数グループを編成した。その際に，教師が意図的に各グループに司会ができる生徒を入れた。また，少人数グループごとに，A2サイズのボードを配布し，2人組で考えた価値や相手の価値に対する反論を書かせた付せんを張り付けさせた（写真1）。



写真1 意見交換の様子

(イ) 考察

2人組で価値や反論を考えさせたため，他人任せにせずに主体的に取り組ませることができ，少人数グループにおいても，活発な意見のやりとりが見られた。また，付せんを使うことで，価値や反論の大まかな内容が一目で分かり，論点を整理しながら意見を考えさせることができた。以上より，上記の手立ては，意見交換の活動の活性化に有効であったといえる。

ウ 社会的問題の多面的・多角的な考察【検証の視点I】

(ア) 具体的な手立て

資料分析において，社会的問題を多面的にとらえさせるため，複数の資料から日本企業の海外生産のメリットやデメリットを読み取らせた。また，多角的にとらえさせるため，「だれにとってそのメリットやデメリットが発生するのか」を考えさせ，ワークシートに記入させた（図3）。そのワークシートを基に，多角的な視点として「消費者」「国際関係」「企業・労働者」の3つを設定し，それぞれにとって，メリットが続くとどのようなよいことにつながるのかを考えさせ，ワークシートに記入させた（図4）。そのよいことを価値としてとらえさせた。

次に，意見交換の活動において，続ける派と縮小する派のそれぞれの価値とその発生理由を発表させ，事実を基に未来を予測させながら反論を考えさせた。

個人で資料を分析しよう

◆海外生産のメリット（なぜ日本企業は海外生産をしているのか？）

資料 1 上り	日本も海外で生産しているから価格が安くなる	消費者	製品が買いやすくなる
資料 1 上り	日本も海外のほうが賃金が安いから	日本企業	安く製品をつくれる
資料 3 上り	海外現地で生産をするから	アメリカなどの海外	産業への影響が減少し、雇用確保がなくなる

◆海外生産のデメリット（海外生産をすることで起こる問題は？）

資料 2 上り	日本製より外国製のほうが品質がよくなる	消費者	悪い品質の製品を買ってしまう
資料 4 上り	人件費は高いけど安い海外に生産拠点が移れば	日本	失業者数が増える
資料 5 上り	海外の安い労働力で作った製品は品質が落ちる	職人	こつこつ精進を続けてきた技術者が売れない

図3 生徒のワークシート①

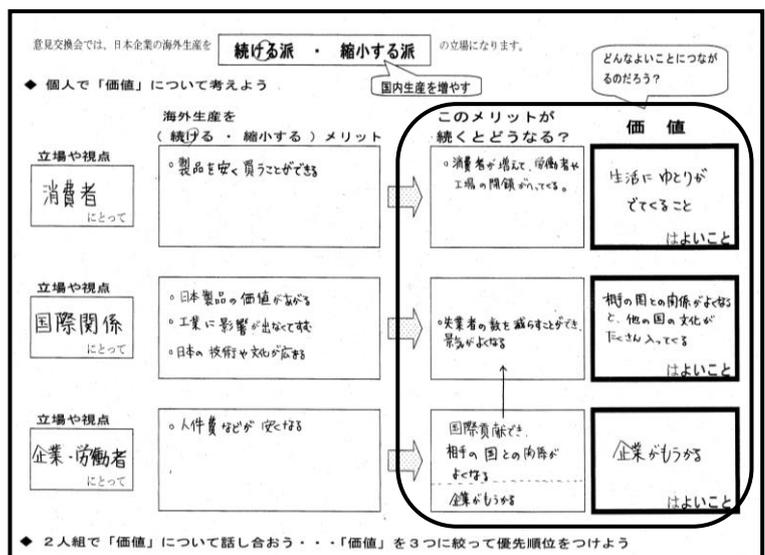


図4 生徒のワークシート②

(イ) 考察

少人数グループの意見交換で、続ける派が「海外生産を縮小し、国内生産を増やすと製品の価格が上昇し、消費者がものを買わなくなる」という意見を述べたのに対し、縮小する派が企業と消費者の立場を関連付けて、「国内生産を増やすと失業者を救済でき、消費も増大して景気よくなる」という反論を述べるなど、複数の立場を関連付けて考えている生徒が多数見られた。また、意見交換の活動を終えての生徒の感想より、「貿易摩擦の意味が分かるようになった」や「海外生産をすることで日本の技術が伝えられ、国際貢献につながるというのはなるほどと思った」など、資料分析した際の疑問点が解決したことや、新たに気付いたことを述べた意見が多数見られた。

以上より、資料分析を基に価値や反論を考えさせて、意見交換の活動を行わせることで、生徒は社会的問題における様々な立場や側面に気づき、それらを関連させることができた。つまり、社会的問題を多面的・多角的に考察できるようになったといえる。

エ 意見交換の活動による社会的思考力の高まり【検証の視点Ⅱ】

(ア) 検証の方法

生徒のワークシートにおける事実判断（意見交換前）と価値判断（意見交換後）のそれぞれの判断理由の記述内容を比較し、次頁表1の文章分析基準を基に、社会的思考力の高まりを検証する。その際に、多面的な記述と多角的な記述に分けて分析する。

(イ) 考察

図5を見ると、多面的な記述においては、互いのメリットの重要性（又はデメリットの深刻性）を比較して記述している生徒が30.0%（12人）から85.0%（34人）に増えた。また、多角的な記述においては、2つ以上の立場を関連付けて記述している生徒が22.5%（9人）から90.0%（36人）に増えた。この結果を受けて、次頁表1の文章分析基準を基に、社会的思考力を評価し、変容を表したものが次頁表2である。事実判断では、社会的思考力がA評価の生徒は11人であったのに対し、価値判断では、28人に増えた（次頁図6）。また、事実判断でC評価だった15人の生徒のうち、価値判断で9人がA評価になった（次頁表2）。次頁表3は、事実判断から価値判断においてC評価からA評価になった抽出生徒Aのワークシートの記述内容を分析したものである。

以上より、検証の視点Ⅰと関連させて考察すると、意見交換の活動を行うことで、多くの生徒が社会的問題における様々な立場や側面に気づき、それらを関連させることができたと考えられる。つまり、意見交換の活動が、社会的思考力を高める上で有効であったといえる。

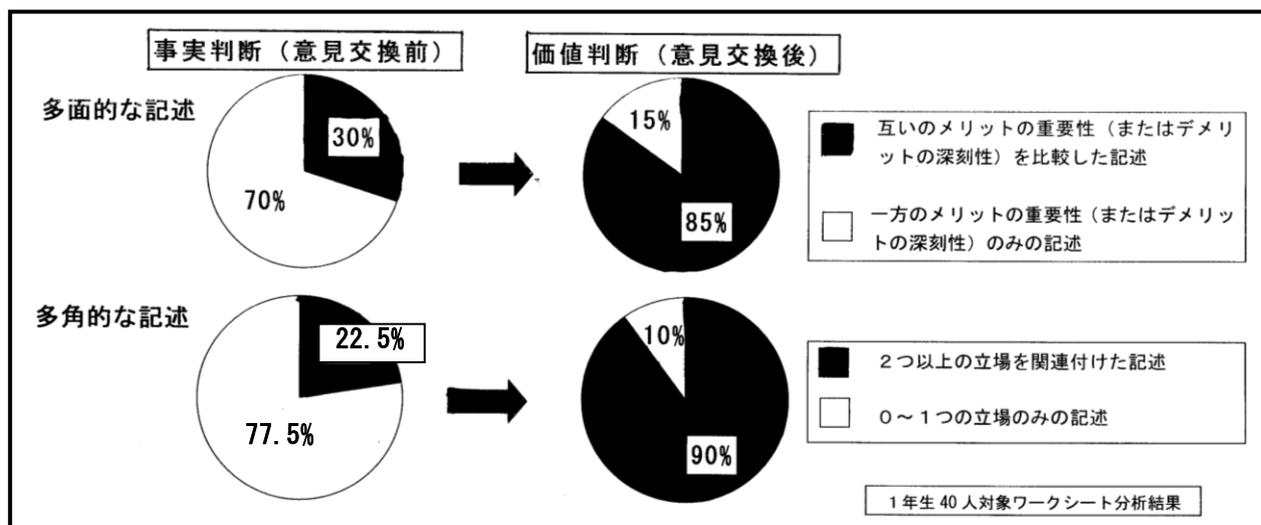


図5 判断理由の文章分析結果

表 1 社会的思考力の文章分析基準

評価	文章分析基準
A	互いのメリットの重要性(デメリットの深刻性)を比較し、2つ以上の立場を関連付けて記述している(多面的かつ多角的)。
B	互いのメリットの重要性(デメリットの深刻性)を比較し、0から1つの立場のみで記述している。または、一方のメリットの重要性(デメリットの深刻性)のみで、2つ以上の立場を関連付けて記述している(多面的または多角的)。
C	一方のメリットの重要性(デメリットの深刻性)のみで、0から1つの立場のみで記述している(多面的でも多角的でもない)。

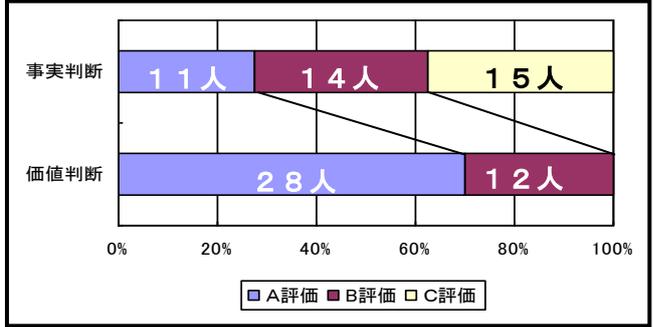


図 6 社会的思考力の評価の変容

表 2 文章分析基準に基づく社会的思考力の評価

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
事実判断	A	A	A	B	B	C	C	C	B	C	C	C	B	A	C	A	C	A	C	A	B	B	B	B	C	C	A	C	B	C	B	C	B	B	A	B	A	A	C	B
価値判断	A	A	A	A	A	B	A	B	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	B	A	B	B	A	A	B	A	A	B	A	A	B	A	B	B	A	A	A	A	A	B

表 3 抽出生徒Aのワークシート

	判断理由の記述内容	多面的な記述	多角的な記述	評価
事実判断	(縮小すべき) 安い海外に生産拠点が移ると、中小企業で働く人々が失業におこまれる。	一方のデメリットの深刻性のみ	1つの立場のみ(労働者のみ)	C
価値判断	(縮小すべき) やはり安心して生活をおくりたいと思ったからです。海外生産を続けると、製品が安いため、金銭に困らず、経済負担が軽くなります。また、日本製品の価値があがり、企業の利益が大きくなります。しかし、どれだけ製品が安くても、安全性のある製品ではないと思うので、最初から安全性のある安心して使える国内生産のものが良いと思います。また、国内の景気がよくなり、失業者が減り、安心して生活できる社会になると 생각합니다。	互いのメリットの重要性を比較している(下線部分)	3つの立場を関連付けている(消費者、企業、労働者)	A

オ 未来予測を踏まえた価値の比較検討を通しての公正な判断力の高まり【検証の視点Ⅲ】

(ア) 具体的な手立て

よりよい社会を意識し、様々な立場の考えを踏まえて判断することができているかを、ワークシートの記述内容を分析して検証する。

図7は、価値判断にもっていくためのワークシートである。全体の場において、少人数グループの意見交換で出された反論を基に、価値の対立点を整理させた。次に、「私たちにとってこれらの価値が続くとどのような社会につながっていくのか」を考えさせることで、よりよい社会を意識させた(未来予測)。さらに、少人数グループで、それぞれの社会を比較検討させた(次頁写真2)。最後に個人で、未来予測を踏まえ、再度価値の比較検討をさせながら、価値判断を行わせた。

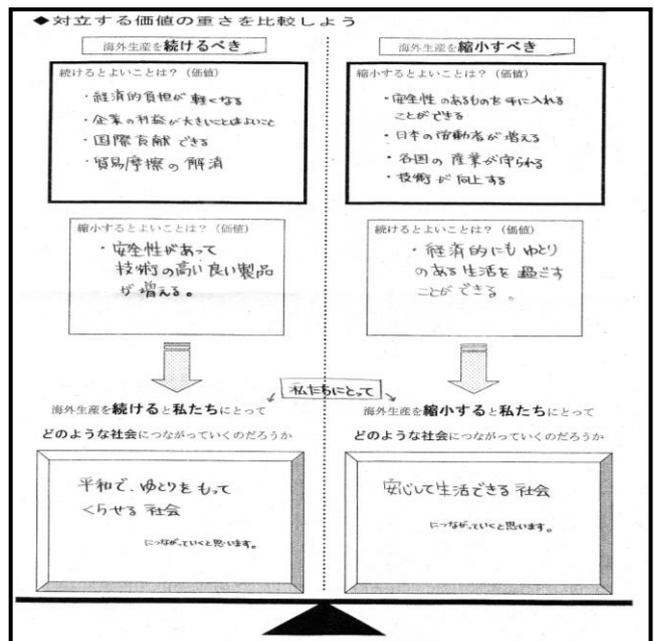


図 7 生徒のワークシート③

(イ) 考察

社会科を苦手に行っている抽出生徒Bのワークシートの記述内容を分析した(図8)。

生徒Bは、意見交換の活動では「縮小すべき派」であった。生徒Bの判断としては、事実判断(最初の判断)及び価値判断(最終判断)において、ともに「続けるべき」の立場をとった。最初の判断は、縮小するデメリットのみで、立場も消費者の視点のみによるものであった。しかし、最終判断では、下線部①のように、消費者の立場における縮小するメリットも踏まえながら、企業の立場も関連付けて、続けるメリットの方が大きいと考え、さらに、下線部②のように、これからの社会を予測した記述も見られた。授業後の感想で、最初の判断について、「資料をいろいろ調べたけど、やっぱり自分の視点でしか見ていなかった。」と振り返り、公正な判断ができていなかったと自覚している。

クラス全員のワークシートを分析し、その結果をまとめた(表4)。様々な立場の考えを踏まえた記述をしている生徒は、事実判断では11人であったのに対し、価値判断では32人に増えた。また、未来を予測した記述をしている生徒は2人から26人に増えた。

以上より、未来予測を行い、価値を比較検討する学習を通して、多くの生徒が、よりよい社会を意識し、様々な立場の考えを踏まえて判断できるようになった。つまり、公正な判断ができるようになったといえる。

(4) 生徒の実態

11月と2月の検証授業実施後にそれぞれアンケート調査をして、生徒の実態を分析した(次頁図9)。問1や問2では、11月の授業と比べて2月の授業における自己評価が高まり、未来を予測しようとする意識や、様々な立場や見方を踏まえて自分の考えをまとめていこうとする意識が、全体的に向上したと考えられる。

問3では、全体の65%に当たる26人の生徒が「よく当てはまる」と答え、「やや当てはまる」まで

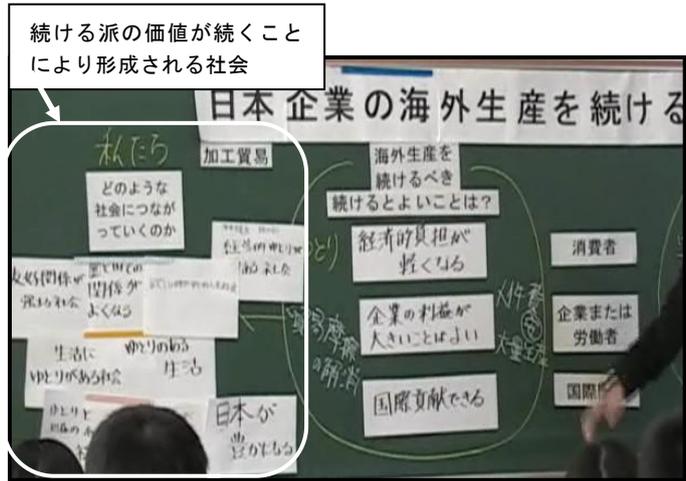


写真2 全体の場における未来予測

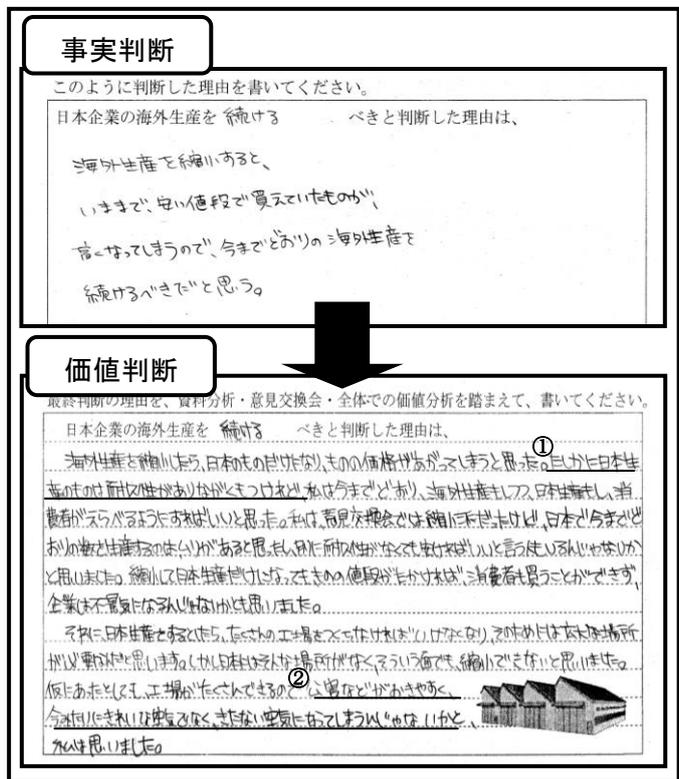


図8 抽出生徒Bのワークシート

表4 判断理由の記述内容の比較(公正な判断)

	事実判断	価値判断
様々な立場の考えを踏まえた記述	11人	32人
未来を予測した記述	2人	26人

加えると、ほとんどの生徒が、価値を意識した意見交換を行うことが、公正に判断することにつながると感じている。その理由として、「資料だけだと判断しにくい、価値を考えると自分に身近に考えることができ判断しやすくなったから」や「価値をよく吟味して決めることができたから」という記述が見られた。

以上より、資料を基に未来予測をさせながら、価値を意識させた意見交換の活動を取り入れた学習を、繰り返し実践していくことが、公正な判断力の育成につながっていくと実感した。

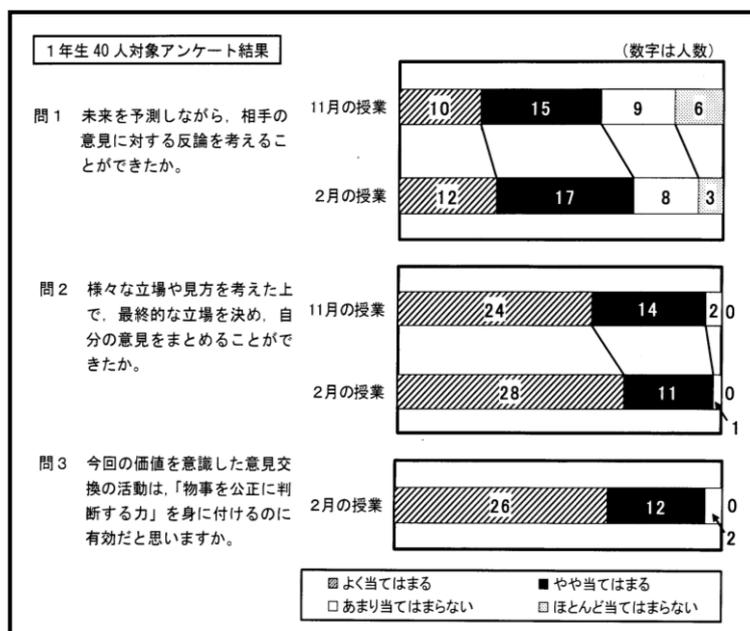


図9 アンケート調査による生徒の実態

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

ア 価値判断が求められる社会的問題を設定し、意見交換の活動を取り入れた学習は、社会的事象を身近にとらえさせ、多面的・多角的な視点を持ち、他の事象と関連付けて考えることができるようになり、社会的思考力を高める手立てとして有効であった。

イ 未来を予測させながら、価値を比較検討する学習を繰り返し実践することは、よりよい社会を意識して、様々な立場の考えを踏まえた公正な判断力の育成に有効であった。

(2) 今後の課題

ア 社会的思考力や公正な判断力の客観的な評価方法の工夫。

イ 価値判断が求められる社会的問題の教材化及び年間指導計画への位置付け。

《引用文献》

- 1) 文部科学省 『中学校学習指導要領』 平成20年3月 文部科学省 p. 31
- 2) 4) 6) 岩田 一彦 『社会科固有の授業理論 30の提言』 2001年 明治図書 p. 28, p. 144, p. 149
- 3) 森分 孝治 『社会科 重要用語300の基礎知識』 2000年 明治図書 p. 109
- 5) 佐長 健司 『社会科研究 第65号』 2006年 p. 41

《参考文献》

- ・ 佐賀県中学校社会科部会 『研究会報 第40号』 2007年